

国立国語研究所学術情報リポジトリ

南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇：
複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): Tarama Ryukyuan, 3-pattern accent system, pitch rising, X=nu Y structure, major phrase 作成者: 青井, 隼人, AOI, Hayato メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001410

南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇 ——複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述——

青井隼人

東京外国語大学 アジアアフリカ言語文化研究所／
国立国語研究所 研究系 言語変異研究領域

要旨

本論文では、南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇に関わる2つの現象に焦点を当て、それらを統一的に記述することを目指す。従来、多良間方言は3つのアクセント型の区別を有し、それらの区別は韻律句における下降の有無と位置とによって実現されると記述されてきた。ところが最近になって五十嵐 (2015)、松森 (2016a, 2016b)、青井 (2017) などによって、当該方言でピッチの上昇が観察される場合があることが報告されている。

本論文では、まず、複数の韻律句が連なる場合のピッチパターンを観察し、多良間方言におけるピッチ上昇が生じる条件を記述する。観察の結果から、多良間方言のピッチ上昇の特徴は次のように要約できる。すなわち、①ピッチ上昇が生じるのは必ず2つ目以降の韻律句である；②ピッチ上昇が実現するためには、当該韻律句の左端の語が有アクセント語であり、かつ当該韻律句よりも前の句でアクセントによるピッチ下降が実現していることが必要である；③ピッチ上昇が生じる位置は下降が予測される位置の1モーラ右である。

本論文では、さらに、属格助詞 =nu を介する名詞句 X=nu Y (「X=nu Y 構造体」(五十嵐 2015)) のピッチパターンの分析もおこなう。結論として、「X=nu Y 構造体」のピッチパターンは、被修飾・修飾関係にある2つ以上の韻律句が1つの韻律的単位 (メジャー句 Major Phrase) を形成し、修飾語にあたる語根 Y を含む韻律語に「アクセント核」が付されると解釈することによって妥当に記述できることを提案する*。

キーワード：南琉球宮古多良間方言、三型アクセント、ピッチ上昇、X=nu Y 構造体、メジャー句

1. 序論

南琉球宮古多良間方言 (以下、多良間方言) は3つのアクセント型の区別を有する。従来、多良間方言の3つのアクセント型は、韻律句 (語根 (+ 接語)) が写像される韻律単位。いわゆる文節) 内部の下降の有無と位置によって区別されると記述されてきた (松森 2010, 2014; 五十嵐 2015, 2016; 青井 2016a, 2016b)。ところが、韻律句が複数並ぶ場合、ピッチの下降ではなく、上昇が観察されることがあると五十嵐 (2015)、松森 (2016a, 2016b)、青井 (2017) によって報告されている。本論文では、このピッチ上昇が、どのような条件で、どのような位置に現れるかを、私自身の調査資料を新たに加え、記述する。

* 本稿の議論は、第153回 NINJAL サロン (2016年11月8日) でおこなった口頭発表および日本言語学会第153回全国大会 (2016年12月3日、於福岡大学) でおこなった口頭発表 (青井 2016c) を基にしている。なお本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「関係性に着目した宮古語音韻構造の探究」(平成26～28年度) の助成を受けて、2014年4月～2017年3月まで国立国語研究所に日本学術振興会特別研究員 PD として滞在した際の研究成果の一部である。

さらに本論文では、五十嵐（2015）が報告している属格助詞 =nu を伴う名詞句 $X=nu\ Y$ 「X の Y」のピッチパターンの再分析をおこなう（なお五十嵐（2015）は当該名詞句を「 $X=nu\ Y$ 構造体」と呼んでいる）。「 $X=nu\ Y$ 構造体」では単純名詞や複合名詞のアクセントには観察されないピッチパターンが現れ、たとえば Y を含む韻律句にピッチ上昇が現れる場合がある。

本論文の構成は以下の通りである。まず第2節で多良間方言のアクセント体系の概略を述べる。多良間方言のアクセント体系に関する詳細な記述は、松森（2014）、五十嵐（2015）、青井（2016a, 2016b）を参照してほしい。第3節では、私が新たに収集したフィールドデータに基づいて多良間方言のピッチの上昇を記述する。第4節では、「 $X=nu\ Y$ 構造体」のピッチパターンの特徴を五十嵐（2015）の記述を基に整理し、その再分析をおこなう。最後に第5節で結論を述べる。

2. 先行研究

従来、多良間方言の三型アクセントは下降の有無と位置が有意味な体系であるとされてきた（松森 2010, 2014; 五十嵐 2015, 2016; 青井 2016a, 2016b）。ところが、いくつかの環境において、ピッチの上昇が観察される場合がある（五十嵐 2015; 松森 2016a, 2016b; 青井 2017）。本節では、発話頭に現れる韻律句におけるアクセントの実現を概略したのち（2.1 節）、多良間方言のピッチ上昇に関する初期的記述をおこなった松森（2016a, 2016b）を要約する（2.2 節）。

2.1 多良間方言の三型アクセント：発話頭の韻律句におけるアクセントの実現

多良間方言の名詞は、韻律句内における下降の有無と位置によって3つの型が区別される三型体系を有する（松森 2010, 2014; 五十嵐 2015, 2016; 青井 2016a, 2016b）。(1) に3つのアクセント型の表層のピッチパターンを示す。以下、例文中の“=”は接語境界，“{ }_{PPH}”は韻律句境界，“()_{PWD}”は韻律語境界（韻律語とは2モーラ以上の語根・接語が写像される単位。韻律語については改めて詳述），“.”はモーラ境界を表す。なお，“]”はピッチの急激な下降を表す。

(1) 多良間方言における名詞アクセントの3つの型の区別

- a. 下降1型 (F1): $madu=mai \dots$ 「暇も…」
 $\{(ma.du)_{PWD}(ma.i)_{PWD}\}_{PPH}$
 $ma]dumai$ — 当該名詞語根 $madu$ の次末モーラでピッチが下降
- b. 下降2型 (F2): $jadu=mai \dots$ 「戸も…」
 $\{(ja.du)_{PWD}(ma.i)_{PWD}\}_{PPH}$
 $jaduma]i$ — 後続の助詞 $=mai$ の次末モーラでピッチが下降
- c. 平板型 (F0): $juda=mai \dots$ 「枝も…」
 $\{(ju.da)_{PWD}(ma.i)_{PWD}\}_{PPH}$
 $judamai$ — 当該韻律句内にピッチ下降がない

(1) において、3つのアクセント型の区別は、韻律句内部にピッチ下降があるかどうか、あるとしたらどこに現れるか、によって実現される。すなわち、(1a) 当該の名詞語根 $madu$ 「暇」の

次末モーラでピッチが下降する：(1b) 付加された助詞 =mai「も」の次末モーラで下降する：(1c) 韻律句内でのピッチの下降がない。(1) に示した表層形のピッチパターンから、3つの型をそれぞれ下降1型 (F1型)、下降2型 (F2型)、平板型 (F0型) と呼ぼう¹。ただし、2.2節で詳しく述べるように、アクセントが（下降ではなく）上昇で実現される場合があることが松森（2016a）などで報告されている。

(1) に示した3つのアクセント型のピッチパターンは、それぞれ (2) のように一般化することができる（松森 2014; 五十嵐 2015; 青井 2016a, 2016b）。

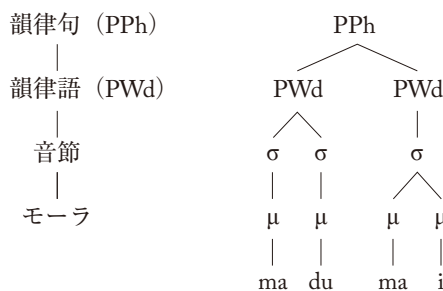
(2) 多良間方言の3つのアクセント型のピッチパターン

- a. 下降1型 (F1)：韻律句の左から1つ目の韻律語の次末モーラで下降する。
- b. 下降2型 (F2)：韻律句の左から2つ目の韻律語の次末モーラで下降する。
- c. 平板型 (F0)：韻律句内部に急激なピッチの下降がない。

(2) に示したように、多良間方言のアクセントを記述するためには、モーラに加えて、韻律語 (prosodic word; PWd) を参照する必要がある（松森 2014; 五十嵐 2015; 青井 2016a, 2016b）。韻律語とは、2モーラ以上の語根および接語が写像される韻律的単位を指す（五十嵐 2015: 9）。たとえば (1a) の韻律句を分析してみよう。当該韻律句は1つの2モーラ名詞（語根）madu「暇」と1つの2モーラ助詞（接語）=mai「も」から構成されている。このとき、2モーラ語根 madu と2モーラ接語 =mai はそれぞれ別の韻律語を形成する。

五十嵐（2015）の定義からわかるように、韻律語は、モーラよりも大きく、かつ韻律句よりも小さい韻律単位である。つまり多良間方言には(3)のような韻律階層を仮定することができる（青井 2016a, 2016b）。

(3) 多良間方言の韻律階層 (Cf. 青井 2016a: 73)



Ex. (1a) madu=mai ... 「暇も…」

多良間方言の語根はすべて2モーラ以上の長さを有するため、必ずそのみで独立した韻律

¹ 松森（2014）および五十嵐（2015）は、琉球祖語に想定される3つのアクセント型（系列）との対応関係から、各型をA型、B型、C型と呼んでいる。本発表で用いる名称との対応は以下の通りである：下降1型 (F1) = C型、下降2型 (F2) = B型、平板型 (F0) = A型。

語を形成する。一方、助詞には1モーラのものが存在し（たとえば主格助詞 =nu や焦点助詞 =du）、これらは韻律語形成の条件である「2モーラ以上の長さ」を満たしていない。このとき、1モーラ語（助詞）は直前の語根ないし接語と1つの韻律語を形成する。たとえば(4)の例を見てみよう。

(4) 1モーラ語は先行する語根・接語と1つの韻律語を形成する

- a. F1 : madu=nu ... 「暇が³…」
 {(ma.du.nu)_{PWd}}_{PPh}
 madu]nu — 当該名詞語根 madu の末尾モーラでピッチが下降
- b. F2 : jadu=nu ... 「戸が³…」
 {(ja.du.nu)_{PWd}}_{PPh}
 jadunu — 当該韻律句内にピッチ下降がない
- c. F0 : juda=nu ... 「枝が³…」
 {(ju.da.nu)_{PWd}}_{PPh}
 judanu — 当該韻律句内にピッチ下降がない
- } 中和

(4) は2モーラ名詞に1モーラ助詞 =nu（主格）が付加された場合の例である。(1) の例と比較すると、F1 型と F2 型のピッチパターンに違いが見られることがわかる。まず F1 型のピッチパターンをそれぞれ見てみると、(1a) では ma]dumai のように韻律句の左から1モーラ目から2モーラ目にかけて下降するのに対し、(4a) では madu]nu のようにその左から2モーラ目から3モーラ目にかけて下降が現れる。

(1a) と (4a) のピッチパターンは、韻律語を仮定することによって統一的に理解することが可能になる。すなわち、(1a) の場合は、{(ma.du)_{PWd}(ma.i)_{PWd}}_{PPh} のように、名詞語根と付加された助詞がそれぞれ別の韻律語を成すのに対して、(4a) の場合は付加された助詞が先行の名詞語根と1つの韻律語を形成し、{(ma.du.nu)_{PWd}}_{PPh} のような韻律構造を成す。以上の韻律構造を仮定することによって、両者のピッチパターンはいずれも「韻律句の左から1つ目の韻律語の次末モーラで下降する」と一般化することができる。以上述べてきたことからわかるように、多良間方言において、アクセントの実現（とくに下がり目の位置）を正しく捉えるためには、モーラだけを参照するのでは不十分であり、韻律語も併せて参照する必要がある（松森 2014; 五十嵐 2015; 青井 2016a, 2016b）。

(1b) と (4b) を比較すると、F2 型のピッチパターンにも違いがあることに気づく。つまり、(1b) では jaduma]i のように韻律句内にピッチの下降が現れるのに対して、(4b) では jadunu のように下降のない平坦なピッチパターンで実現される。この事実は、当該韻律句内に1つしか韻律語が存在しないときには、F2 型のアクセントが実現されないと考えることによって理解することができる（青井 2017）。つまり、(2) に示したように、F2 型の下がり目は当該韻律句の左から2つ目の韻律語において実現されるが、(4) のように韻律句に1つの韻律語しか含まれない（言い換えれば、下がり目が現れるはずの2つ目の韻律語が存在しない）場合、F2 型のアクセントは実現されない。その結果、(4) の環境において、F2 型は F0 型と中和する（五十嵐 2015; 青

井 2016a, 2016b, 2017)。

(5) と (6) に青井 (2016b) で提示した多良間方言のアクセントの基底表示と実現規則を示す。なお、表現の仕方は多少異なっているものの、韻律句をアクセントが実現するドメインとする点、韻律語をアクセント核付与の単位とする点、モーラがアクセント核を担うとする点などは、松森 (2014)、五十嵐 (2015)、青井 (2016a, 2016b) に共通している。

(5) 多良間方言の 3 つのアクセント型の基底表示

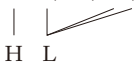


- a. 下降 1 型 (F1) : 有核。当該語根から始まる韻律句の 1 つ目の韻律語に核を指定する。
- b. 下降 2 型 (F2) : 有核。当該語根から始まる韻律句の 2 つ目の韻律語に核を指定する。
- c. 平板型 (F0) : 無核。

(6) 多良間方言のアクセントの実現規則

- a. アクセント核付与規則
 - － 韻律句の初頭の語根のアクセント型が F1 型なら、当該韻律句の左から 1 つ目の韻律語にアクセント核を付与せよ。
 - － 韻律句の初頭の語根のアクセント型が F2 型なら、当該韻律句の左から 2 つ目の韻律語にアクセント核を付与せよ。
- b. 下降位置確定規則
付与された韻律語の次末モーラにアクセント核を付与せよ。
- c. 音調付与規則
アクセント核が指定されたモーラまでは H 音調を付与し、それ以降のモーラには L 音調を付与せよ。

(7) に (1) におけるアクセントの実現プロセスを例示する (青井 2016b: 73)。アクセント核は付与されたモーラの右肩にアスタリスク “*” を付すことによって示す。

(7) アクセント実現規則の適用過程：(1) の場合

	a. F1 型 <i>madu</i> 「暇」	b. F2 型 <i>jadu</i> 「戸」	c. F0 型 <i>juda</i> 「枝」
形態統語構造	<i>madu=mai ...</i>	<i>jadu=mai ...</i>	<i>juda=mai ...</i>
音韻構造	{(ma.du) _{PWd} (ma.i) _{PWd} } _{PPH}	{(ja.du) _{PWd} (ma.i) _{PWd} } _{PPH}	{(ju.da) _{PWd} (ma.i) _{PWd} } _{PPH}
実現規則 (6a, b)	{(ma*.du) _{PWd} (ma.i) _{PWd} } _{PPH}	{(ja.du) _{PWd} (ma*.i) _{PWd} } _{PPH}	{(ju.da) _{PWd} (ma.i) _{PWd} } _{PPH}
実現規則 (6c)			
ピッチパターン	ma]dumai	jaduma]i	judamai

さて、多良間方言の名詞アクセント体系について本節で述べてきたことを (8) に要約しよう。

(8) 多良間方言の名詞アクセント体系の特徴

- a. 3つのアクセント型の区別を有する（すなわち三型体系である）。
- b. 3つのアクセント型の区別は当該韻律句内部の下降の有無と位置によって実現される。
- c. 3つのアクセント型の区別を記述するためには、韻律句とモーラに加えて、韻律語を参照する必要がある。

(8b) に述べたように、3つのアクセント型の区別は、これまでに観察してきた環境 (1) および (4) においては、韻律句内に生じるピッチ下降の有無と位置によって実現されていた。ところが、2つ以上の韻律句が連なる環境で、アクセントが下降ではなく上昇で実現されることが松森 (2016a, 2016b) によって報告されている。2.2 節では松森 (2016a, 2016b) の多良間方言のピッチ上昇に関する記述を要約する。なお、五十嵐 (2015) にもピッチ上昇に関する記述が見られるが、五十嵐 (2015) については第4節で詳しく取り上げる。

2.2 松森 (2016a, 2016b)

松森 (2016a) は、多良間方言について、複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの初期的な記述をおこなった研究である。その過程で、アクセント核が付された韻律語においてピッチの（下降ではなく）上昇が生じる場合があることを報告している。松森 (2016a) によれば、ある韻律句にアクセント核を有する韻律語があるとき、当該韻律句より以前にアクセント核によるピッチ下降が実現されている場合に、アクセント核で（ピッチの下降ではなく）ピッチの上昇が観察される。(9) に松森 (2016a: 3) の例を引用する（ただし表記は一部本稿のものに従って改めた）。なお、ピッチパターンの表記法は松森 (2016a) に従っており、各韻律句の音調を [] で括った H・L によって表す（“H” は高ピッチ，“L” は低ピッチを表す）。

(9) 複数の韻律句が連続する場合のピッチパターン①（松森 2016a: 3。表記は一部改変）

- a. kinuu 「きのう (F1)」, joonaa 「ゆっくり (F1)」, katami- 「運ぶ (F1)」
 kinuu=mai joonaa katamii+butar. 「昨日もゆっくり運んでいた。」
 $\{(ki.nu^*.u)_{PWd}(ma.i)_{PWd}\}_{PPH}$ $\{(jo.o.n.na^*.a)_{PWd}\}_{PPH}$ $\{(ka.ta.mi^*.i)_{PWd}(bu.ta.r)_{PWd}\}_{PPH}$
 [H L] [L H] [H L]
- b. kjuu 「きょう (F2)」, joonaa 「ゆっくり (F1)」, katami- 「運ぶ (F1)」
 kjuu=mai joonaa katamii+butar. 「今日もゆっくり運んでいた。」
 $\{(kju.u)_{PWd}(ma^*.i)_{PWd}\}_{PPH}$ $\{(jo.o.n.na^*.a)_{PWd}\}_{PPH}$ $\{(ka.ta.mi^*.i)_{PWd}(bu.ta.r)_{PWd}\}_{PPH}$
 [H L] [L H] [H L]
- c. pir 「昼 (F0)」, joonaa 「ゆっくり (F1)」, katami- 「運ぶ (F1)」
 pir=mai joonaa katamii+butar. 「昼もゆっくり運んでいた。」
 $\{(pi.r)_{PWd}(ma.i)_{PWd}\}_{PPH}$ $\{(jo.o.n.na^*.a)_{PWd}\}_{PPH}$ $\{(ka.ta.mi^*.i)_{PWd}(bu.ta.r)_{PWd}\}_{PPH}$
 [H] [H L] [L H]

(9c) を見ると、有核語を含む 1 つ目の韻律句 (joonnaa {(jo.o.n.na*.a)_{PWd}})_{PPH} 「ゆっくり」) では下降 [H L] が生じているのに対し、それに続く 2 つ目の有核語を含む韻律句 (katamii+butar {(ka.ta.mi*.i)_{PWd}}(bu.ta.r)_{PWd}})_{PPH} 「運んでいた」) では上昇 [L H] が生じていることがわかる。また (9a, b) のように有核語を含む韻律句が 3 つ続く場合には、3 つ目のアクセント核を含む韻律句でふたたび下降 [H L] が生じている。

(9) の現象を記述するために、松森 (2016a, 2016b) は従来のアクセント規則を「各イントネーション句を H 音調で開始し、アクセントを持つモーラの位置で、隣とは反対の音調に変えよ (松森 2016b: 74)」のように修正することを提案している (松森 (2016a) はこの規則を「音調逆転規則」と仮称している)。すなわち、それまではアクセント核によって「下がり目」が指定されると考えられてきたのに対し、松森 (2016a, 2016b) はアクセント核によって指定されるのは「隣の音調と反対である」ことだと考えたのである。

松森 (2016a, 2016b) の修正案は、ピッチの下降が有意味であると考えられてきた多良間方言のアクセントについて再考を促す重要な指摘である。しかしながら、ピッチ上昇の実現位置に関して誤った予測をしてしまう点で問題が残る。すなわち、松森 (2016a, 2016b) はピッチの下降と上昇はどちらもアクセント核のあるモーラとその直後のモーラとのあいだで生じるというように記述している。(9) の表記法ではピッチの下降位置・上昇位置が明示的に示されていないが、松森 (2016b) では (10) のように下線と上線によって各モーラの高さを示しており、ピッチの下降も上昇も同じ位置で生じていると松森 (2016b) が観察していることがわかる。例文中、上線は H 音調を、下線は L 音調を表す。

(10) 複数の韻律句が連続する場合のピッチパターン (松森 2016b: 74。表記は一部改変)

kinuu=mai upusju+kami=u katamii+butar. 「昨日も海水甕を運んでいた。」

{(ki.nu*.u)_{PWd}}(ma.i)_{PWd}})_{PPH} {(u.pu*.sju)_{PWd}}(ka.mi.u)_{PWd}})_{PPH} {(ka.ta.mi*.i)_{PWd}}(bu.ta.r)_{PWd}})_{PPH}

kinu:mai upus^uugamiu katami: butaL

(10) の例文において、各韻律句はいずれも左から 1 つ目の韻律語の次末モーラに核が指定されている。そしてこのとき、ピッチの下降と上昇が交互に現れるが、下降・上昇のいずれも核が指定されている位置に現れると松森 (2016b) が観察していることが (10) からわかる。しかしながら、第 3 節で詳述するように、実際にはピッチの下降位置と上昇位置は互いに異なる位置に現れる。具体的には、ピッチの上昇は、下降の位置よりも、1 モーラ右に現れる。

3. ピッチ上昇の記述

前節では、多良間方言の三型アクセントの概略を述べた上で、アクセント型の区別が環境によって下降で実現したり上昇で実現したりすることを述べた。本節では、私が 2016 年 7 月末～8 月初旬にかけて現地地で収集したデータに基づき、多良間方言のピッチ上昇を記述する。録音機器は Marantz PMD661、マイクは AKG C520 を使用し、サンプル周波数 44.1 kHz 16 bit、WAV 形式で録音した。

なお、調査協力者は男性 1 名（1935 年生・字塩川出身²）である。

本節の構成は以下の通りである。まず本調査で用いた粋文について 3.1 節で説明する。つづいて 3.2 節で調査結果を記述し、最後に 3.3 節で結果の解釈に関して議論する。

3.1 粋文

録音には（11）の 3 つの粋文を用いた。α/β/γ には表 1 の調査語彙がそれぞれ入る。

（11）調査で用いた粋文

- a. uja=kara=mai α=kara=mai kii. 「父からも α からも聞いた。」（uja 「父」 = F1 型）
- b. adan+kii=mai β+kii=mai miitar. 「アダンの木も β の木も見た。」（adan 「アダン」 = F1 型）
- c. waa+msju=mai γ+msju=mai fuutar. 「豚味噌も γ 味噌も食べた。」（waa 「豚」 = F1 型）

表 1 調査語彙

	F1 型	F2 型	F0 型
調査語彙 α	anna 「母」	midum 「妻」	ffa 「子」
調査語彙 β	gazima 「ガジユマル」	mami 「豆」	kuba 「クバ」
調査語彙 γ	zimami 「ピーナッツ」	avva 「油」	katjuu 「鯉」

（11）の各文の 1 つ目の韻律句の左端に位置する名詞語根（それぞれ（11a）uja 「父」、（11b）adan 「アダン」、（11c）waa 「豚」）はすべて F1 型であり、いずれも当該韻律句の左から 1 つ目の韻律語の次末モーラに下降が生じるピッチパターンで実現される。（12）に各韻律句のピッチパターンを示す。

（12）各粋文の 1 つ目の韻律句のピッチパターン

- a. uja=kara=mai ... 「父からも…」
 $\{(u^*.ja)_{Pw\alpha}(ka.ra)_{Pw\alpha}(ma.i)_{Pw\alpha}\}_{PPh}$
 u]jakaramai
- b. adan+kii=mai ... 「アダンの木も…」
 $\{(a.da^*.n)_{Pw\alpha}(ki.i)_{Pw\alpha}(ma.i)_{Pw\alpha}\}_{PPh}$
 ada]ngi:mai
- c. waa+msju=mai ... 「豚味噌も…」
 $\{(wa^*.a)_{Pw\alpha}(m.sju)_{Pw\alpha}(ma.i)_{Pw\alpha}\}_{PPh}$
 wa]:ms^jumai

ピッチの観察は Praat (ver. 5.4.01) を用いておこなった。調査語彙を含む韻律句（つまり左から 2 つ目の韻律句）にピッチの上昇があるかどうか、あるとしたらどの位置に現れるか、をとく

² 多良間方言には大きく分けて塩川変種と仲筋変種の 2 つの変種が認められる。アクセント体系に関して、両変種のあいだに目立った差異は（少なくとも現時点では）報告されていない。

に観察した。なお、(12)に示した通り、調査枠文はいずれも1つ目の韻律句内に下降が生じるため、2つ目の韻律句は必ず低く始まる。

3.2 結果

観察の結果は(13)のように要約できる。

(13) 観察結果の要約：多良間方言におけるピッチ上昇

- a. ピッチの上昇は $\alpha/\beta/\gamma$ が有核語（つまり F1 型・F2 型）であるときに生じる。
- b. ピッチの上昇は下降が予測される位置よりも1モーラ右に現れる。

それでは具体的な結果を観察してみよう。(14～16)に(11)の枠文を使用して収集した結果をそれぞれ掲げる。調査語彙 $\alpha/\beta/\gamma$ を含む韻律句のピッチパターンに注目してほしい。なお、述語のピッチパターンについては省略する。

(14) 調査結果①：枠文(11a)を使用（uja「父」= F1 型）

- a. α = anna「母」(F1)
 uja=kara=mai anna=kara=mai ... 「父からも母からも…」
 $\{(u.ja)_{Pw}(ka.ra)_{Pw}(ma.i)_{Pw}\}_{PPh} \{(a.n.na)_{Pw}(ka.ra)_{Pw}(ma.i)_{Pw}\}_{PPh}$
 uljakaramai anna[karamai — 付加した1つ目の助詞=karaの直前でピッチが上昇
- b. α = midum「妻」(F2)
 uja=kara=mai midum=kara=mai ... 「父からも妻からも…」
 $\{(u.ja)_{Pw}(ka.ra)_{Pw}(ma.i)_{Pw}\}_{PPh} \{(mi.du.m)_{Pw}(ka.ra)_{Pw}(ma.i)_{Pw}\}_{PPh}$
 uljakaramai midumkara[mai — 付加した2つ目の助詞=maiの直前でピッチが上昇
- c. α = ffa「子」(F0)
 uja=kara=mai ffa=kara=mai ... 「父からも子からも…」
 $\{(u.ja)_{Pw}(ka.ra)_{Pw}(ma.i)_{Pw}\}_{PPh} \{(f.fa)_{Pw}(ka.ra)_{Pw}(ma.i)_{Pw}\}_{PPh}$
 uljakaramai ffakaramai — 韻律句全体が低いピッチで実現（ピッチの変動なし）

(15) 調査結果②：枠文(11b)を使用（adan「アダン」= F1 型）

- a. β = gazima「ガジュマル」(F1)
 adan+kii=mai gazima+kii=mai ... 「アダンの木もガジュマルの木も…」
 $\{(a.da.n)_{Pw}(ki.i)_{Pw}(ma.i)_{Pw}\}_{PPh} \{(ga.zi.ma)_{Pw}(ki.i)_{Pw}(ma.i)_{Pw}\}_{PPh}$
 ada]ngi:mai gazima[gi:mai — 後部要素kiiの直前でピッチが上昇
- b. β = mami「豆」(F2)
 adan+kii=mai mami+kii=mai ... 「アダンの木も豆の木も…」
 $\{(a.da.n)_{Pw}(ki.i)_{Pw}(ma.i)_{Pw}\}_{PPh} \{(ma.mi)_{Pw}(ki.i)_{Pw}(ma.i)_{Pw}\}_{PPh}$
 ada]ngi:mai mamigi:[mai — 付加した2つ目の助詞=maiの直前でピッチが上昇

c. β = kuba 「クバ」 (F0)

adan+kii=mai kuba+kii=mai ... 「アダンの木もクバの木も…」

{(a.da.n)^{PWd}(ki.i)^{PWd}(ma.i)^{PWd}}^{PPH} {(ku.ba)^{PWd}(ki.i)^{PWd}(ma.i)^{PWd}}^{PPH}

ada]ngi:mai kubagi:mai — 韻律句全体が低いピッチで実現 (ピッチの変動なし)

(16) 調査結果③：粹文 (11c) を使用 (waa 「豚」 = F1 型)

a. γ = zimami 「ピーナッツ」 (F1)

waa+msju=mai zimami+msju=mai ... 「豚味噌もピーナッツ味噌も…」

{(wa.a)^{PWd}(m.sju)^{PWd}(ma.i)^{PWd}}^{PPH} {(zi.ma.mi)^{PWd}(m.sju)^{PWd}(ma.i)^{PWd}}^{PPH}wa]:ms^lumai zimami[ms^lumai — 後部要素 msju の直前でピッチが上昇b. γ = avva 「油」 (F2)

waa+msju=mai avva+msju=mai ... 「豚味噌も油味噌も…」

{(wa.a)^{PWd}(m.sju)^{PWd}(ma.i)^{PWd}}^{PPH} {(a.v.va)^{PWd}(m.sju)^{PWd}(ma.i)^{PWd}}^{PPH}wa]:ms^lumai avvams^lu[mai — 付加した 2 つ目の助詞 =mai の直前でピッチが上昇c. γ = katjuu 「鰹」 (F0)

waa+msju=mai katjuu+msju=mai ... 「豚味噌も鰹味噌も…」

{(wa.a)^{PWd}(m.sju)^{PWd}(ma.i)^{PWd}}^{PPH} {(ka.tju.u)^{PWd}(m.sju)^{PWd}(ma.i)^{PWd}}^{PPH}wa]:ms^lumai kateu:ms^lumai — 韻律句全体が低いピッチで実現 (ピッチ変動なし)

まずピッチ上昇の有無について観察しよう。すると、2 つ目の韻律句の左端にある名詞語根 $\alpha/\beta/\gamma$ が有核 (つまり F1 型か F2 型) のときに、当該韻律句内にピッチの上昇が現れることがわかる。具体的に (15) の 3 つの例文を比較してみよう (ここでは詳細に取り上げないが、(14, 16) でも同様の特徴が観察される)。(15a, b) のように調査語彙 β が有核 (F1 型もしくは F2 型) のときには、当該韻律句内にピッチの上昇が生じる。一方、(15c) のように β が無核 (F0 型) のときにはピッチ上昇は現れない。なお、この事実は、2.2 節で見たように、すでに松森 (2016a) が指摘していることである。

次にピッチ上昇の位置について観察しよう。(15a, b) の 2 つの例文を比較すると、ピッチの上昇が現れる位置が互いに異なっていることがわかる。図 1 に (15) の 3 つの例文の基本周波数曲線を示す (図中の “ \downarrow ” はピッチ下降の位置, “ \uparrow ” はピッチ上昇の位置を示す。なお、(14, 16) の基本周波数曲線は稿末に付録として掲げる)。

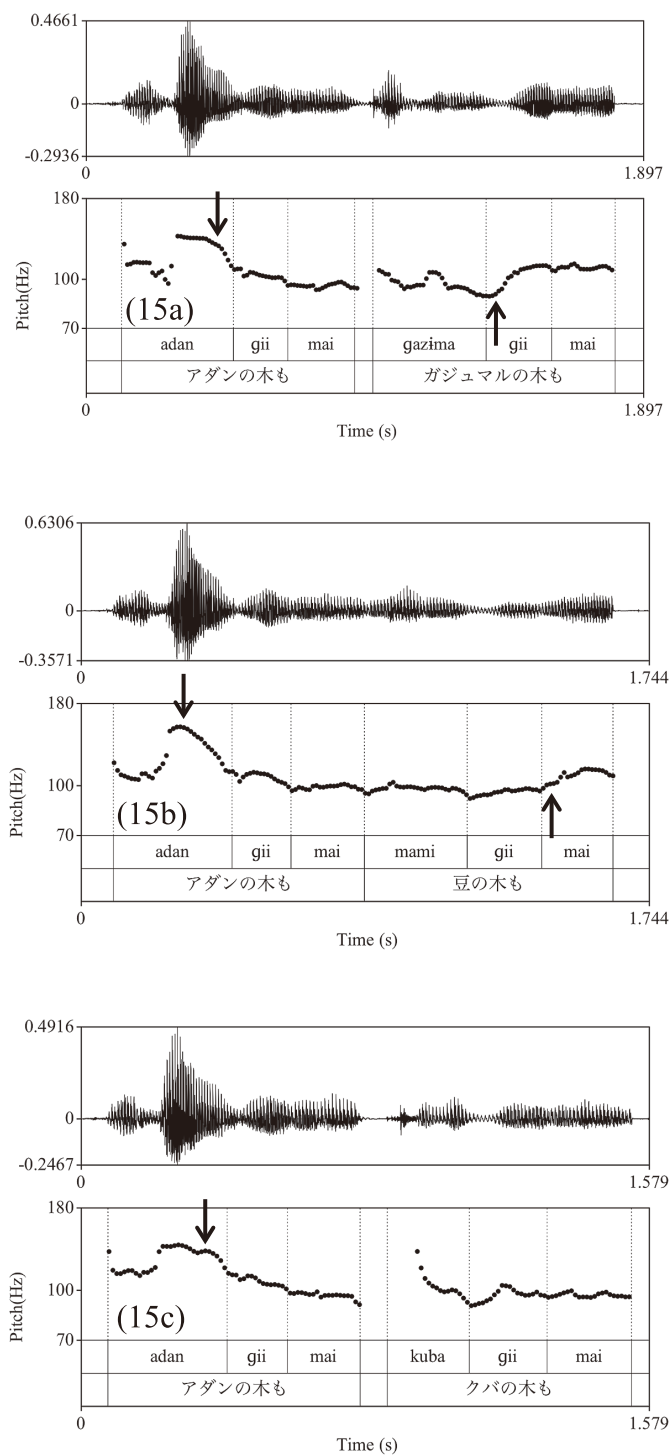


図1 (15a～c) の基本周波数曲線

(15a) と (15b) のピッチ上昇位置の違いを図 1 で比較してみよう。図 1 の “↑” の位置に注目してほしい。β が F1 型である (15a) では、複合名詞の前部要素 *gazima* 「ガジユマル」全体が低く実現されたのち、後部要素 *kii* 「木」の直前でピッチが上昇する。一方、(15b) のように β が F2 型であるときには、複合名詞 *mami+kii* 「豆の木」全体が低く実現され、助詞 *=mai* 「も」の直前でピッチが上昇する。

(15a) と (15b) のピッチ上昇位置の違いは、松森 (2016a, 2016b) が示唆しているように、アクセント型の違い（つまりアクセント核の位置の違い）を反映していると考えられるだろう。つまり、β が F1 型である (15a) は当該韻律句の左から 1 つ目の韻律語の末尾モーラから次の韻律語にかけて上昇が生じ、一方 β が F2 型である (15b) では上昇が当該韻律句の左から 2 つ目の韻律語の末尾モーラに生じている。以上の違いは、F1 型が当該韻律句の左から 1 つ目の韻律語に核が指定されるのに対して、F2 型では 2 つ目の韻律語に核が指定されるのと並行的に捉えることができるだろう。したがって、多良間方言におけるピッチの上昇はアクセント核の有無と位置の違いを反映していると解釈できる。

ただし (15) で観察されたピッチ上昇の位置は、ピッチ下降が予測される位置とは異なっていることに注意しよう。すなわちピッチ下降は韻律句の左から 1 つ目 (F1 型の場合) もしくは 2 つ目 (F2 型の場合) の韻律語の次末モーラに現れる。したがって、上で観察したピッチの上昇が実現される位置は、ピッチ下降が予測される位置よりもさらに 1 モーラ右に現れるとするのが妥当な一般化であると言えるだろう。発話頭の韻律句における β のアクセントの実現を (17) に示す。

(17) 発話頭におけるピッチパターン (Cf. (15))

- a. β = *gazima* 「ガジユマル」 (F1)
gazima+kii=mai ... 「ガジユマルの木も…」
 $\{(ga.zi.ma)_{PwA}(ki.i)_{PwA}(ma.i)_{PwA}\}_{PPH}$
gazi]magi:mai — 前部要素 *gazima* の次末モーラでピッチが下降
- b. β = *mami* 「豆」 (F2)
mami+kii=mai ... 「豆の木も…」
 $\{(ma.mi)_{PwA}(ki.i)_{PwA}(ma.i)_{PwA}\}_{PPH}$
mamigi]:mai — 後部要素 *kii* の次末モーラでピッチが下降
- c. β = *kuba* 「クバ」 (F0)
kuba+kii=mai ... 「クバの木も…」
 $\{(ku.ba)_{PwA}(ki.i)_{PwA}(ma.i)_{PwA}\}_{PPH}$
kubagi:mai — 韻律句全体が高いピッチで実現 (ピッチの変動なし)

3.3 議論

松森 (2016a, 2016b) の記述および私自身のデータに基づく記述から、多良間方言のピッチ上昇の特徴は次のように要約できる。すなわち、①ピッチ上昇が生じるのは必ず 2 つ目以降の韻律

句である；②ピッチ上昇が実現するためには、当該韻律句よりも前の句でピッチ下降が実現していることが必要である；③ピッチ上昇が生じる位置は下降が予測される位置の1モーラ右である。

多良間方言におけるピッチの上昇を記述するために、松森（2016a）は「音調逆転規則」を提案している。しかし松森（2016a）のこの規則では、3.2節で観察したピッチ上昇を妥当に記述することができない。すなわちピッチ上昇が出現する位置はピッチ下降が出現する位置よりも1モーラ右にあり、したがって「アクセントの直後のモーラから反対の音調を付与せよ」と言う上記の規則では、ピッチの下がり目と上がり目が一致しない事実を説明するには不十分である。

それではどのような規則に改変すれば、多良間方言のアクセントを妥当に記述できるだろうか。残念ながら、現時点ではそれを検討するための十分な資料が揃っていない。したがって本論文では現時点で考えうる可能性を提示するにとどめ、いずれが妥当であるかの詳細な議論は今後の課題としたい。

まず、解決しなければならない問題を3点指摘しておこう。1つ目は、ピッチの下降と上昇が交替するドメインは何かという問題である。3.2節で観察したのは、2つの名詞句が連続する環境における2つ目の韻律句のピッチパターンだった。また、松森（2016a, 2016b）は副詞句＋動詞句（例：joonaa katamii+butar「ゆっくり運んでいた」）におけるピッチ上昇の例を報告している。さらに、青井（2017）が記述しているように、名詞句（主語もしくは目的語）と動詞句（述語）の連鎖でもピッチの下降と上昇の交替は生じうる。

これまでの報告から、このピッチの下降と上昇の交替はかなり広範な範囲で生じることが予想される。このピッチの交替がどこまで拡がりうるのか、言い換えれば交替の生じる範囲を決定する要因は何であるのかは、今後さまざまな統語構造の単文、さらには複文にまで、観察対象を広げてデータを蓄積して検証していく必要がある。

2つ目の問題は、ある環境では下降で実現するアクセントが、別の環境ではなぜ上昇で実現するのか、である。さらに3つ目の問題として、下降と上昇とで実現位置が互いに異なるのはなぜかも併せて考えなければならない。

さて、多良間方言のアクセント核に指定される特徴として、以下の3つの可能性を考えることができるだろう。

(18) 多良間方言のアクセント核が指定される位置と結びつく音調

- a. アクセント核は韻律語の次末モーラに付与；アクセント核には「音調の逆転」が指定される（Cf. 松森 2016a, 2016b）
- b. アクセント核は韻律語の次末モーラに付与；アクセント核には「下降」が指定される（Cf. 松森 2010, 2014; 五十嵐 2015; 青井 2016a, 2016b）
- c. アクセント核は韻律語の末尾モーラに付与；アクセント核には「低」が指定される（Cf. 青井 2016c）

(18a) は松森（2016a, 2016b）が提案した「音調逆転規則」と同じものである。すでに指摘しているように、この規則にはピッチの下降と上昇とで位置が異なる事実を説明できないという問

題点が残る。ただし、「ピッチの上昇は韻律語内では生じない（言い換えれば、ピッチ上昇は韻律語境界でしか生じない）」という制約を仮定すれば、両者の実現位置の違いをうまく説明できる可能性はある³。すなわち、(19) に示すように、2つ目の韻律句ではアクセント核の指定によって「上昇」が実現するのだが、その位置は「ピッチの上昇は韻律語内では生じない」という制約により、韻律語境界まで右にずれて実現される。

(19) ピッチ上昇は韻律語内では実現しない

adan+kii=mai gazima+kii=mai ... 「アダンの木もガジュマルの木も…」

{(a.da*.n)PwA(ki.i)PwA(ma.i)PwA}PPH {(ga.zi*.ma)PwA(ki.i)PwA(ma.i)PwA}PPH

[H L]

[L H]

ada]n gi:mai

*gazi[ma gi:mai → gazima[gi:mai

ただし「ピッチの上昇は韻律語内では生じない」という制約を多良間方言に仮定するのが妥当であるかどうかは、今後検証が必要である。なぜなら、多良間方言のデータだけでは、ピッチの上昇が「1 モーラ右に移動した」のか「韻律語の境界まで右に移動した」のか、どちらであるのかを判断できないからである。したがって、近隣の方言に類似した現象がないか、あるとしたらその現象はどのように記述できるか（とくに韻律語がどのように関わっているか）を明らかにしていく必要がある。

(18b) は、松森 (2010) 以来の従来の解釈を変更せず、多良間方言のアクセント核で指定されるのはあくまで「下降」であるとする解釈である。この解釈を採用したとき、アクセント型の区別が「下降」で実現される場合の記述にはもちろん問題はない。しかしながら、本節で詳しく見てきたように、いくつかの条件が揃った場合には「上昇」で実現しうる。

この事実は、次のように考えることで説明が可能かもしれない。すなわち、1度下降した後の韻律句でも「下降」は実現しているが、その「下降」は1度目のそれと比較して不明瞭である。その不明瞭な「下降」を明瞭にするために余剰的に次のモーラが高く実現される。その結果、「上昇」が韻律語の末尾モーラに現れる。なお、以上と類似した説明が、この後に引用する上村 (1990) に述べられている。

(18a) と (18b) は、「逆転」であれ「下降」であれ、ピッチの変動を次末モーラに指定するという解釈である。一方、(18c) は、アクセント核が指定されるのが韻律語の「末尾モーラ」であり、核が指定されたモーラが「低ピッチという状態」で実現するという2点で前二者と異なる。この解釈は、アクセントが下降で実現するピッチパターンと上昇で実現するピッチパターンとを比較したときに、安定して出てくる特徴が「アクセントが付された韻律語の末尾モーラが低ピッチで実現する」ことに注目して提案された改定案である (青井 2016c)。(20) に示すように、ピッチが下降するピッチパターンと上昇で実現するピッチパターンとを比較すると、当該韻律句の左から1つ目の韻律語の末尾モーラ ((20) では下線で示した) が一貫して低く実現される。

³ このアイデアは窪蘭晴夫氏の助言によるところが大きい。

(20) アクセントが付された韻律語の末尾モーラは常に低く実現される

gazi^{ma}+kii=mai

{(ga.zi.ma*)_{PWa}(ki.i)_{PWa}(ma.i)_{PWa}}_{PPH}

a. ga zi]ma gi i ma i (下降で実現する場合)

b. ga zi ma[gi i ma i (上昇で実現する場合)

(18c) の解釈は、上村 (1990) の grave accent を想起させる。上村 (1990) は、日本語諸方言のアクセントを acute accent と grave accent の 2 タイプに分け、前者を「聴覚的なたかさ (pitch) をたかく、すなわち、音響的には基本周波数 (fundamental frequency) をおおきくし、かつ聴覚的なきこえ (loudness) をおおきく、すなわち音響的には波形の振幅 (intensity) をおおきくするための積極的な調音的な努力がなされる型のアクセント」、後者を「聴覚的なたかさをひくくするために、呼吸筋、および／もしくは声帯をはじめとする発声に關与する喉頭の諸筋肉をよりおおきく緊張させる型のアクセント」と説明している。grave accent の具体例として、上村 (1990) はロシア語と都城方言 (尾高一型) を挙げている。

さらに、多良間方言のアクセントの実現と関連して興味深いのは、grave accent に付随してピッチの上昇が観察されうることを上村 (1990) が指摘している点である。上村 (1990) はこのピッチ上昇を「声門における呼気の通過をひくい量におしとどめていた喉頭の緊張の解除とともに、たかめられていた喉頭下の気圧が、声帯にはやい開閉運動を一時的におこさせる結果生じるものである」としている。

本節では、多良間方言のアクセントをより正しく記述するための規則の改定案を 3 つ提示した。その中から本論文では (18b) の改定案 (つまりアクセント核は韻律語の次末モーラに指定され、当該モーラには「下降」の音調が結びつく) を暫定的に採用する。この選択は、従来の規則案からの変更がもっとも少ないという消極的な理由による。今後、さらなるデータを蓄積した上で、多良間方言のアクセント規則をどのように改定すべきかを検証していかなければならない。

4. 属格助詞 =nu を伴う名詞句のピッチパターン

多良間方言のアクセント型の区別が下降ではなく上昇で実現される場合があることを松森 (2016a) が報告するより以前に、属格助詞 =nu を伴う名詞句においてピッチの上昇が観察される場合があることを五十嵐 (2015) が報告している。なお、五十嵐 (2015) では「属格助詞 =nu を伴う名詞句」を「X=nu Y 構造体」と呼んでおり、本論文でも同名詞句に対して同じ名称を用いることとする。

本節では、まず 4.1 節で五十嵐 (2015) の記述を要約し、「X=nu Y 構造体」に観察されるピッチパターンの特徴を整理する。つづいて 4.2 節で、第 3 節の結果を踏まえ、「X=nu Y 構造体」のピッチパターンを再分析する。結論として、名詞語根 Y を含む韻律句のピッチパターンは被修飾語 Y に付された「アクセント核」によるものであるという解釈を提案する。最後に 4.3 節で、4.2 節の再分析の結果から得られるいくつかの予測と今後の課題を述べる。

4.1 五十嵐 (2015)

五十嵐 (2015: 35) は、多良間方言のアクセント体系の記述に関わる残された課題の 1 つとして「X=nu Y 構造体」のピッチパターンを挙げている。その要点は (21) の 3 点に要約できる。

(21) 「X=nu Y 構造体」に観察されるピッチパターンの特徴

- a. 語根 Y を含む韻律句でピッチの上昇が現れる場合がある。
- b. 上昇がない場合には、語根 Y を含む韻律句で下降が生じる。
- c. 語根 Y のアクセント型は構造体全体のピッチパターンに関与しない。

具体的な例を見ながら、上記の要点を確認してみよう。(22) に語根 X が単純名詞の場合の「X=nu Y 構造体」のピッチパターンを示す (なお、名詞語根 Y のアクセント型は F0 型に統一してある)。

(22) 「X=nu Y 構造体」のピッチパターン①: X が単純名詞の場合 (五十嵐 2015: 36)

- a. X = tamana 「キャベツ (F1)」 × Y = paa 「葉 (F0)」
 tamana=nu paa=mai ... 「キャベツの葉も…」
 $\{(ta.ma.na^*.nu)_{PWA}\}_{PPh} \{(pa.a)_{PWA}(ma.i)_{PWA}\}_{PPh}$
 tamana]nu pa:[mai
- b. X = mami 「豆 (F2)」 × Y = paa 「葉 (F0)」
 mami=nu paa=mai ... 「豆の葉も…」
 $\{(ma.mi.nu)_{PWA}\}_{PPh} \{(pa.a)_{PWA}(ma.i)_{PWA}\}_{PPh}$
 maminu pa]:mai
- c. X = pir 「にんにく (F0)」 × Y = paa 「葉 (F0)」
 pir=nu paa=mai ... 「にんにくの葉も…」
 $\{(pi.r.nu)_{PWA}\}_{PPh} \{(pa.a)_{PWA}(ma.i)_{PWA}\}_{PPh}$
 pi[nu pa]:mai

「X=nu Y 構造体」は X を含む韻律句と Y を含む韻律句の 2 つの韻律句で構成されている (これ以降、前者を韻律句 X、後者を韻律句 Y と呼ぶ)。まずは韻律句 X のピッチパターンから観察してみよう。韻律句 X については、第 3 節までで観察したものと異なる特徴はとくに見つからない。韻律句 X には 1 つの韻律語が含まれるが、このような環境では、3 つではなく、2 つのタイプのピッチパターンが観察される (つまり F2 型と F0 型とのあいだで型の区別が中和する。(4) の例を思い出そう)。すなわち、韻律句内部に下降が現れるタイプ (22a) と現れないタイプ (22b, c) である (五十嵐 2015; 青井 2016a, 2016b, 2017)。ここで観察される F2 型と F0 型との中和は、1 つしか韻律語を含まない韻律句においては F2 型のアクセントが実現されないために生じる。

つづいて韻律句 Y を観察しよう。韻律句 Y には (21a, b) のいずれかのピッチパターンが観察される。すなわち、(22a) では韻律句 Y でピッチの上昇が現れる。それに対し、(22b, c) では韻律句 Y にピッチの下降が生じている。

韻律句 Y のピッチパターンをもう少し詳細に見てみよう。(22a) は、先行する韻律句 X の左端にある語根（つまり韻律句 X のピッチパターンを決定する語根）のアクセント型が F1 型であるときの例である。このとき、韻律句 X で 1 度下降が生じた後、韻律句 Y でピッチの上昇が生じている。このピッチ上昇は語根 Y (paa「葉」) の直後に現れている。

一方、(22c) の例を見てみよう。韻律句 X の左端の語根のアクセント型が F0 型であるとき、韻律句 X は高い平坦なピッチで実現され、韻律句 Y で下降する。なお、下降が生じる位置は、語根 Y (paa「葉」) の次末モーラである。以上のピッチパターンは、(22b) のように、語根 X のアクセント型が F2 型である場合でも同様である。

韻律句 Y に観察されるピッチの上昇・下降のパターンは、第 3 節で記述したアクセントによるピッチの上昇・下降のパターンと以下の 2 つの点で類似している。すなわち、①韻律句 Y でピッチが下降するか上昇するかは、先行する韻律句 X でピッチが下降しているかどうかによる。つまり先行する韻律句 X で下降が生じていれば、韻律句 Y では上昇が生じる。一方、先行する韻律句 X で下降がなければ、韻律句 Y では下降が生じる；②韻律句 Y において、ピッチ上昇が現れる場合、その位置は、ピッチ下降が現れる場合と比較して、1 モーラ右である。ただし、韻律句 Y のピッチパターンは、それを決定しているのが語根 Y のアクセント型ではない点で特異である。すなわち、(22) において名詞語根 Y に入る paa「葉」のアクセント型は F0 型であり、本来であれば韻律句 Y にはピッチの下降も上昇も生じないはずである。

(22) のように X が単純名詞の場合、韻律句 X には 1 つしか韻律語が含まれず、したがって F2 型のアクセントは実現されない。その結果、X が F2 型のときには韻律句 Y でピッチ下降が生じる。一方、X が複合名詞である場合、X のアクセント型が F2 型のときにも韻律句 Y にピッチ上昇が生じる。(23) にその例を示す (Y のアクセント型は F0 型に統一)。

(23) 「X=nu Y 構造体」のピッチパターン②：X が複合名詞の場合（五十嵐 2015: 36）

- a. X = waa+msju 「豚味噌 (F1)」 × Y = kada 「匂い (F0)」
 waa+msju=nu kada=mai ... 「豚味噌の匂いも…」
 $\{(wa.a)^{Pw_d}(m.sju.nu)^{Pw_d}\}_{PPh} \{(ka.da)^{Pw_d}(ma.i)^{Pw_d}\}_{PPh}$
 wa]:ms'unu kada[mai
- b. X = avva+msju 「油味噌 (F2)」 × Y = kada 「匂い (F0)」
 avva+msju=nu kada=mai ... 「油味噌の匂いも…」
 $\{(a.v.va)^{Pw_d}(m.sju.nu)^{Pw_d}\}_{PPh} \{(ka.da)^{Pw_d}(ma.i)^{Pw_d}\}_{PPh}$
 avvams'u]nu kada[mai
- c. X = guma+msju 「胡麻味噌 (F0)」 × Y = kada 「匂い (F0)」
 guma+msju=nu kada=mai ... 「胡麻味噌の匂いも…」
 $\{(gu.ma)^{Pw_d}(m.sju.nu)^{Pw_d}\}_{PPh} \{(ka.da)^{Pw_d}(ma.i)^{Pw_d}\}_{PPh}$
 gumams'u]nu ka]damai

(23) の例を見ると、X のアクセント型が F1 型のときだけでなく、F2 型のときにも、韻律句

Yでピッチの上昇が生じていることがわかる。これは韻律句Xに含まれる韻律語が2となるために、当該韻律句でF2型のアクセントが実現されるためであると考えられる。つまり、(23b)において、先行する韻律句Xにピッチ下降が生じているために、韻律句Yではピッチが上昇する。一方、(23c)のように、Xのアクセント型がF0型るとき（言い換えれば、韻律句Xに下降が生じないとき）は、韻律句Yに下降が観察される。

(22)と(23)で見てきたように、「X=nu Y構造体」において、韻律句Xに下降が生じる場合は韻律句Yには上昇が現れ、韻律句Xに下降が生じない場合は韻律句Yには下降が生じる。すでに指摘したように、以上の特徴は第3節で記述したアクセントによるピッチの下降・上昇のパターンと類似している。ただし、「X=nu Y構造体」のピッチパターンは、韻律句Yに観察されるピッチの下降・上昇がYのアクセント型に左右されない点で特異である。言い換えれば、(21c)に掲げたように、Yのアクセント型は「X=nu Y構造体」のピッチパターンの決定には関与していない。たとえば(24)の3つの例文はYのアクセント型がすべて異なるが、韻律句Yのピッチパターンは3つのあいだで違いがなく、すべてYの次末モーラで下降するピッチパターンで実現される。構造体全体を見てみても、3つの例文のピッチパターンは同じである。

(24) 「X=nu Y構造体」のピッチパターン③：XがF0型の単純名詞の場合（五十嵐 2015: 36）

- a. X = kadi 「風 (F0)」 × Y = utu 「音 (F1)」
 kadi=nu utu=mai ... 「風の音も…」
 $\{(ka.di.nu)_{PWA}\}_{PPH} \{(u^*.tu)_{PWA}(ma.i)_{PWA}\}_{PPH}$
 kadinu u]tumai
- b. X = usi 「牛 (F0)」 × Y = jaa 「家 (F2)」
 usi=nu jaa=mai ... 「牛の家も…」
 $\{(u.si.nu)_{PWA}\}_{PPH} \{(ja.a)_{PWA}(ma^*.i)_{PWA}\}_{PPH}$
 usinu ja]:mai
- c. X = pir 「にんにく (F0)」 × Y = paa 「葉 (F0)」
 pir=nu paa=mai ... 「にんにくの葉も…」
 $\{(pi.r.nu)_{PWA}\}_{PPH} \{(pa.a)_{PWA}(ma.i)_{PWA}\}_{PPH}$
 pi]nu pa]:mai

(24)の韻律句Yのピッチパターンに注目してほしい。3つの例文において、語根Yのアクセント型はそれぞれ異なっているにもかかわらず、いずれもYの次末モーラで下降するピッチパターンを取る。すでに指摘しているように、Yのアクセント型がF0型（無核型）であっても、同様にピッチ下降が生じる。この事実は多良間方言のアクセントの実現を考える上で非常に興味深い。なぜなら、XとYはそれぞれアクセントを持つ名詞語根であり、かつX=nuとY=maiはそれぞれ別の韻律句を成すからである。韻律句がアクセント型の区別の実現のドメインであることを踏まえると、このときYのアクセントは実現されることが予測されるが、実際にはそうっていない。「X=nu Y構造体」のピッチパターンの実現において、Yのアクセント型が無視される

というのは、複合名詞のアクセントの実現と類似した特徴であると言える。すなわち、多良間方言において、複合名詞 X+Y のピッチパターンは前部要素 X のアクセント型によって決定され、後部要素 Y のアクセント型は無視される（松森 2014; 五十嵐 2015）。

ただし、(21a) に掲げたような特徴的なピッチパターンは複合名詞のアクセントには観察されない。つまり、複合名詞 X+Y を含む韻律句においてはピッチの上昇はこれまでに観察されていない。したがって、「X=nu Y 構造体」で Y のアクセント型が無視される事実は、複合名詞 X+Y の Y のアクセント型が無視される仕組みとはひとまず区別して考えておこう。

4.2 再分析

第3節でおこなったピッチ上昇の記述を踏まえて、「X=nu Y 構造体」のピッチパターンを再分析してみよう。3.2 節の要点は (25) の通りである。

(25) 3.2 節の要点

- a. ピッチ上昇が生じるのは必ず2つ目以降の韻律句である。
- b. ピッチ上昇が実現するためには、当該韻律句よりも前の句でピッチ下降が実現していることが必要である。
- c. ピッチ上昇が生じる位置は下降が予測される位置の1モーラ右である。

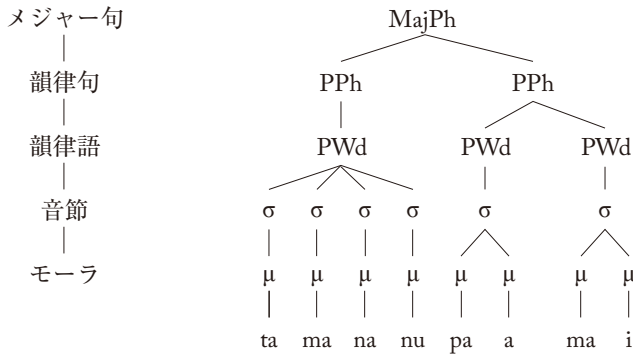
(25) の3つの特徴は「X=nu Y 構造体」で観察されたピッチパターンと非常によく似ている。まず、ピッチ上昇が生じるのは必ず2つ目の韻律句（つまり韻律句 Y）であり、1つ目の韻律句である韻律句 X にはピッチ上昇は現れない。韻律句 X でピッチの変動があるとすれば、それは必ず下降である。次に、韻律句 Y でピッチが下降するか上昇するかは先行する韻律句 X で下降が現れるかどうかによる。言い換えれば、韻律句 X で下降が現れれば韻律句 Y では上昇が生じ、韻律句 X で下降が生じなければ韻律句 Y では下降が生じる。最後に、韻律句 Y に現れるピッチ下降と上昇の位置を比較すると、ピッチ上昇は下降の1モーラ右に現れる。

3.2 節で観察したピッチパターンと「X=nu Y 構造体」のピッチパターンで異なるのは、2つ目の韻律句のピッチ下降・上昇を決定するのが当該韻律句の左端に位置する語根のアクセント型ではない点である。すなわち、3.2 節で観察された韻律句においては、ピッチ上昇の有無と位置は当該韻律句の左端の語根のアクセント型の違いと一致していた。ところが「X=nu Y 構造体」における韻律句 Y のピッチの上昇・下降は Y のアクセント型とは無関係である。Y のアクセント型がどれであるかにかかわらず、下降であれば Y の次末モーラに、上昇であれば Y の末尾モーラに現れる⁴。

⁴ 「X=nu Y 構造体」における韻律句 Y のピッチパターンは、当該韻律句の左から1つ目の韻律語にピッチ変動が現れる点で、F1 型のピッチパターンと同じである。したがって「X=nu Y 構造体」の韻律句 Y（属格助詞 =nu に後続する韻律句？）では、アクセント型が F1 型に中和すると考えれば、上記のピッチパターンをうまく説明できるかもしれない。しかし、なぜこの環境でアクセント型が中和するのか、そしてなぜ中和する先が F1 型であるのかは説明できない。

本論文では、以下のような説明を提案したい。まず、2つの韻律句 $X=\text{nu}$ と $Y=\text{mai}$ は1つの韻律的単位を構成すると仮定する（仮にメジャー句 Major Phrase; MajPh と呼ぼう）。

(26)



Ex. (22a) tamana=nu paa=mai ... 「キャベツの葉も…」

何がメジャー句を形成するかは問題であるが、ここではひとまず「(被修飾語と修飾語のような) 統語的にまとまりうる複数の韻律句は1つのメジャー句を形成する」と仮定しておこう。この問題については4.3節で改めて取り上げる。

次に、メジャー句 $X=\text{nu}$ $Y=\text{mai}$ 「XのYも」をドメインとして適用される(27)の2つの規則を仮定する。


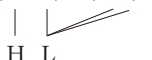
(27) メジャー句 $X=\text{nu}$ $Y=\text{mai}$ 「XのYも」をドメインとして適用される2つの規則

- a. 語根Yのアクセント型を削除する。
- b. 語根Yを含む韻律語の次末モーラに「アクセント核」を付与する。

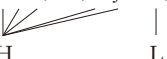
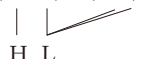
(27b) について、ここで「アクセント核」という名称を、たとえ括弧付きであっても、使用するのには誤解を招きうるかもしれない。というのは、ここでの「アクセント核」は $X=\text{nu}$ $Y=\text{mai}$ というメジャー句に適用される規則の結果、被修飾語Yを含む韻律語に付されるものであって、Yの語アクセントによるものではないからである。しかしそれでもここで「アクセント核」という名称を用いるのは、これ以降詳しく説明するように、この「アクセント核」のふるまいが語アクセントの核と同じであると解釈できるからである。

それでは、メジャー句を仮定し、(27)の2つの規則を導入したとき、「 $X=\text{nu}$ Y 構造体」のピッチパターンがどのように分析できるかを見てみよう。その過程は(28～30)のように記述できる。なお、メジャー句の境界は「 $[]_{\text{MajPh}}$ 」によって示す。



(28) 「X=nu Y 構造体」のピッチパターンの再分析①：(23a) の場合

(23a)	X = waa+msju 「豚味噌 (F1)」	Y = kada 「匂い (F0)」
形態統語構造	waa+msju=nu	kada=mai
音韻構造	{{(wa.a) ^{PWd} (m.sju.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{{(ka.da) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh} } _{MajPh}
実現規則 (6a, b)	{{(wa*.a) ^{PWd} (m.sju.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{{(ka.da) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh} } _{MajPh}
実現規則 (27a, b)	{{(wa*.a) ^{PWd} (m.sju.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{{(ka*.da) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh} } _{MajPh}
実現規則 (6c)		
ピッチパターン	wa]:ms ¹ unu	ka]damai → kada[mai

(29) 「X=nu Y 構造体」のピッチパターンの再分析②：(23b) の場合

(23b)	X = avva+msju 「油味噌 (F2)」	Y = kada 「匂い (F0)」
形態統語構造	avva+msju=nu	kada=mai
音韻構造	{{(a.v.va) ^{PWd} (m.sju.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{{(ka.da) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh} } _{MajPh}
実現規則 (6a, b)	{{(a.v.va) ^{PWd} (m.sju*.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{{(ka.da) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh} } _{MajPh}
実現規則 (27a, b)	{{(a.v.va) ^{PWd} (m.sju*.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{{(ka*.da) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh} } _{MajPh}
実現規則 (6c)		
ピッチパターン	avvaams ¹ ju]nu	ka]damai → kada[mai

(30) 「X=nu Y 構造体」のピッチパターンの再分析③：(23c) の場合

(23c)	X = guma+msju 「胡麻味噌 (F0)」	Y = kada 「匂い (F0)」
形態統語構造	guma+msju=nu	kada=mai
音韻構造	{{(gu.ma) ^{PWd} (m.sju.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{{(ka.da) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh} } _{MajPh}
実現規則 (6a, b)	{{(gu.ma) ^{PWd} (m.sju.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{{(ka.da) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh} } _{MajPh}
実現規則 (27a, b)	{{(gu.ma) ^{PWd} (m.sju.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{{(ka*.da) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh} } _{MajPh}
実現規則 (6c)		
ピッチパターン	gumams ¹ unu	ka]damai

まずXのアクセント型がF0型である(30)から見てみよう。このとき韻律句Yにはピッチの下降が生じる。ピッチ下降の位置は語根Yを含む韻律語の次末モーラである。このピッチ下降は、被修飾語Yを含む韻律語の次末モーラに付された「アクセント核」によるものであると分析できる。すなわち、韻律句Yにおいて、「アクセント核」が付されたモーラにはH音調が結びつき、それ以降のモーラにはL音調が結びつく。その結果、語根Yを含む韻律語の次末モーラの下降として実現される。

つづいて(28, 29)をそれぞれ見てみよう。両者では韻律句Yにピッチの上昇が生じる。ピッ

チ上昇の位置は語根 Y を含む韻律語の末尾モーラである。このピッチ上昇も、やはり語根 Y を含む韻律語の次末モーラに付された「アクセント核」によるものであると考えることができる。ただし、(28, 29) の場合は、(30) とは異なり、「上昇」で実現される。それは、3.3 節で議論した通り、先行する韻律句でピッチの下降が実現した場合、当該韻律句では、「下降」があったことを明示的にするために、「下降」直後のモーラが高く実現されるからである。

4.3 いくつかの予測と今後検討すべき課題

4.2 節では、「X=nu Y 構造体」で観察されるピッチパターンを、メジャー句の仮定とそれをドメインとして適用される 2 つの規則を仮定することによって、記述できることを提案した。本節では、4.1 節では触れることができなかった「X=nu Y 構造体」のピッチパターンを取り上げ、その過程で浮かび上がる今後検討すべき課題について述べておきたい。

4.3.1 「X=nu Y 構造体」において、韻律句 Y に含まれる韻律語が 1 つしかない場合

五十嵐 (2015) は、韻律句 Y に含まれる韻律語が 1 つしかない場合には、韻律句 Y にピッチの上昇が観察されないことを報告している。(31) の例を見てみよう。

(31) 「X=nu Y 構造体」のピッチパターン④：韻律句 Y に韻律語が 1 つしか含まれない場合

- a. X = F1 型 × Y = F0 型： upusju+kami=nu ui=n ... 「海水用の瓶の上に…」
 [{{(u.pu*.sju)PWa(ka.mi.nu)PWa}PPH}{{(u.i.n)PWa}PPH}]MajPh
 upu]sjuɡaminu uin
- b. X = F2 型 × Y = F0 型： mim+kami=nu ui=n ... 「耳瓶の上に…」
 [{{(mi.m)PWa(ka.mi*.nu)PWa}PPH}{{(u.i.n)PWa}PPH}]MajPh
 mimɡami]nu uin
- c. X = F0 型 × Y = F0 型： mizi+kami=nu ui=n ... 「水瓶の上に…」
 [{{(mi.zi)PWa(ka.mi.nu)PWa}PPH}{{(u.i.n)PWa}PPH}]MajPh
 miziɡaminu ui]n

まず韻律句 X のピッチパターンを見ると、X が有核語である (31a, b) の場合に、当該韻律句内にピッチ下降が生じている。一方、無核語である (31c) の場合には当該韻律句内にピッチ下降は生じていない。このとき、4.1 節の記述からは、(31a, b) には韻律句 Y にピッチの上昇が観察されることが予想される。なぜなら、4.1 節の記述から、韻律句 Y のピッチパターンを決定するのは韻律句 X のピッチパターンであり、韻律句 X に下降が生じる場合には韻律句 Y は上昇で実現し、韻律句 X に下降が生じない場合には韻律句 Y は下降で実現すると予想されるからである。ところが (31a, b) を見ると、韻律句 Y には上昇が生じていない。

(31) のピッチパターンは、4.2 節の議論を踏まえると、次のように分析できる。つまり、(31c) では語根 Y を含む韻律語に付された「アクセント核」と結びついた音調が「下降」で実現される。一方、(31a, b) においては、「上昇」が（下降が現れる場合と比較して 1 モーラ右、すなわち）

当該韻律語末尾に生じることが予測される。ところが、そのピッチ上昇は「X=nu Y 構造体」の外部に現れるため、(31) では記述されていない。したがって次のような現象が観察されるとすれば、(31) のピッチパターンは 4.1 節の記述と矛盾しない。すなわち、(31a, b) ではピッチ上昇が韻律句 Y の直後に生じているはずであり、韻律句 Y に後続する述語は高く続くはずである。

4.3.2 「X=nu Y=nu Z 構造体」のピッチパターン

「X=nu Y 構造体」に加えて、五十嵐 (2015) は「X=nu Y=nu Z 構造体」のピッチパターンも (1 例だけではあるが) 記述している。

(32) 「X=nu Y=nu Z 構造体」のピッチパターン：X が複合名詞、Y・Z が F0 型の単純名詞の場合

- a. X = F1 型: *adan+kii=nu paa=nu panta=mai ...* 「アダン木の葉の先も…」

$$\{[(a.da^*.n)_{PWd}(ki.i.nu)_{PWd}]_{PPh} \{[(pa.a.nu)_{PWd}]_{PPh} \{[(pa.n.ta)_{PWd}(ma.i)_{PWd}]_{PPh}\}_{MajPh} ada]ngi:nu pa:nu panta[mai$$
- b. X = F2 型: *mami+kii=nu paa=nu panta=mai ...* 「豆木の葉の先も…」

$$\{[(ma.mi)_{PWd}(ki.i^*.nu)_{PWd}]_{PPh} \{[(pa.a.nu)_{PWd}]_{PPh} \{[(pa.n.ta)_{PWd}(ma.i)_{PWd}]_{PPh}\}_{MajPh} mamigi:]nu pa:nu panta[mai$$
- c. X = F0 型: *kuba+kii=nu paa=nu panta=mai ...* 「クバ木の葉の先も…」

$$\{[(ku.ba)_{PWd}(ki.i.nu)_{PWd}]_{PPh} \{[(pa.a.nu)_{PWd}]_{PPh} \{[(pa.n.ta)_{PWd}(ma.i)_{PWd}]_{PPh}\}_{MajPh} kubagi:nu pa:nu pan]tamai$$

まず、すべての語根 X・Y・Z のアクセント型が F0 型である (32c) のピッチパターンを見よう。このとき韻律句 X・Y にはピッチの変動は生じず、韻律句 Z でピッチの下降が生じる。語根 Z (paa「葉」) のアクセント型は F0 型であり、したがってこのピッチ下降は語根 Z のアクセントによるものと考えすることはできない。4.2 節の議論を踏まえると、韻律句 Z のピッチ下降は「X=nu Y=nu Z 構造体」において被修飾語 Z を含む韻律語に付された「アクセント核」によるものであると解釈できる。(32a, b) の韻律句 Z のピッチパターンを見ると、語根 Z の直後にピッチの上昇が生じているが、このピッチ上昇もやはり被修飾語 Z を含む韻律語に付された「アクセント核」によるものと考えることができる。

「X=nu Y=nu Z 構造体」の分析から、以下の 2 点が今後の課題として浮かび上がってくる。まず、メジャー句は 2 つ以上の韻律句を含みうることがわかるが、一体いくつの韻律句までが 1 つのメジャー句を形成しうるのだろうか。この問題については、今後さらに複雑な統語構造の枠文 (例: X=nu Y=nu Z=nu P=mai ...) を用いて記述をおこなう必要がある。また、どのような韻律句の連続がメジャー句を形成するかの検討も併せておこなう必要がある。「X=nu Y 構造体」の場合、韻律句 X と韻律句 Y の統語的關係は修飾・被修飾の關係であるが、同様に修飾・被修飾の關係にある複数の韻律句は 1 つのメジャー句を形成するのだろうか。たとえば、連体詞と名詞句 (例: *anu kii=mai ...* 「あの木も…」) や形容詞句と名詞句 (例: *takasjaar kii=mai ...* 「高い木も…」), 動詞句と名詞句 (例: *tubiibur ina=mai ...* 「走っている犬も…」) には、「X=nu Y 構造体」と同様のピッ

チパターンが観察されるだろうか。

もう1点は、構造体の最初の韻律句と最後の韻律句以外の韻律句（たとえば「X=nu Y=nu Z 構造体」における韻律句 Y）がどのように実現されるのかという問題である。（「X=nu Y 構造体」および「X=nu Y=nu Z 構造体」の観察から、最初の韻律句においては X のアクセント型の区別が実現されることはわかる。また、構造体の右端の韻律句においては、Z のアクセント型は削除されると考えられる。一方、両者のあいだに位置する韻律句において、Y のアクセント型が実現されるのか、それとも削除されるのかは (32) のデータからは不明である。「X=nu Y=nu Z 構造体」が1つのメジャー句を構成すると仮定される場合、韻律句 Z における Z のアクセントが削除されるように、Y のアクセントが削除されることは充分予想されうる。ところが (32) の場合、Y のアクセント型は F0 型に統一されており、当該韻律句が平坦なピッチパターンで実現されている。したがって、韻律句 Y のピッチパターンが、Y のアクセントが実現された結果であるのか、それとも削除された結果であるのかは判別できない。以上の問題を検討するためには、Y に有核語が現れるときにどのようなピッチパターンで実現されるかを検証しなければならない。

5. 結論

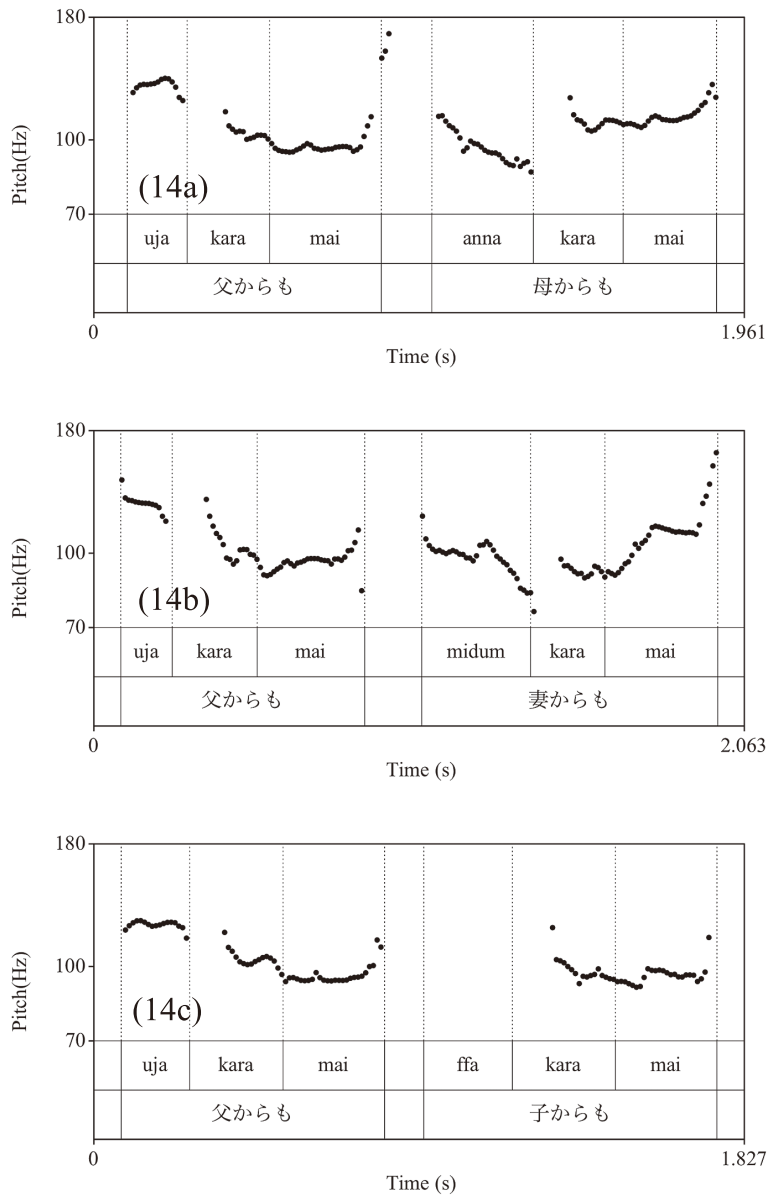
本論文では、多良間方言のピッチパターンを、とくにピッチ上昇に注目して記述した。多良間方言のアクセントは、韻律句内部のピッチ下降の有無と位置とによって3つの型が区別されるが、その一方で、五十嵐 (2015) や松森 (2016a, 2016b)、青井 (2017) によって、ピッチの上昇が観察される場合があることが報告されていた。

本論文では、第2節で多良間方言のアクセントに関する先行研究をレビューしたのち、第3節で多良間方言のピッチ上昇の記述をおこなった。その結果、以下の3点が明らかとなった。すなわち、①ピッチ上昇が生じるのは必ず2つ目以降の韻律句である；②ピッチ上昇が実現するためには、当該韻律句よりも前の句でピッチ下降が実現していることが必要である；③ピッチ上昇が生じる位置は下降が予測される位置の1モーラ右である。

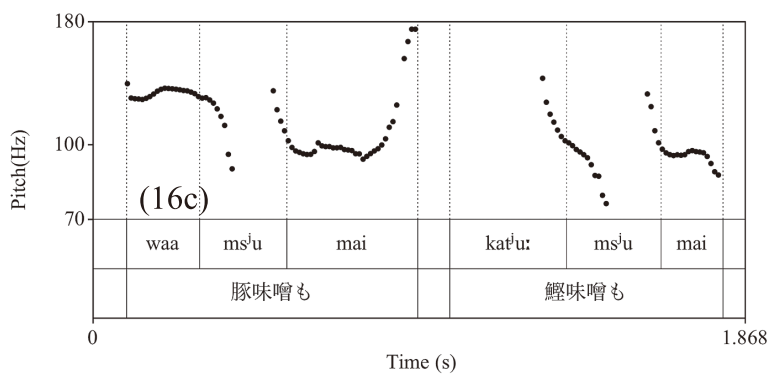
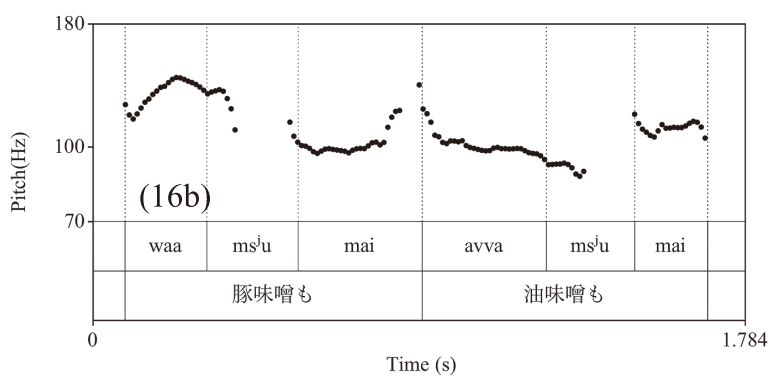
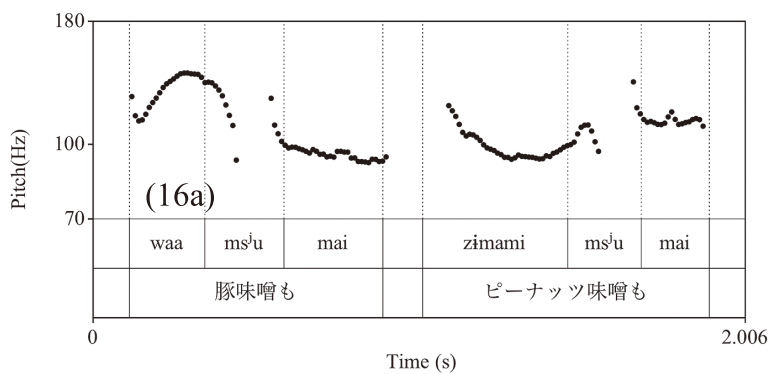
第4節では、第3節での議論を踏まえて、「X=nu Y 構造体」(五十嵐 2015) のピッチパターンの再分析をおこなった。五十嵐 (2015) によれば、「X=nu Y 構造体」において、語根 Y を含む韻律句（韻律句 Y）には、語根 Y のアクセントによらないピッチの下降もしくは上昇が観察される。本論文では、複数の韻律句が1つの韻律的単位を構成し（本論文では仮に「メジャー句」と呼んだ）、その韻律的単位の右端に位置する韻律句の左端の韻律語（つまり被修飾語 Y を含む韻律語）に「アクセント核」が付されると解釈することによって、「X=nu Y 構造体」のピッチパターンを妥当に記述できることを示した。

今後は、さらに資料を追加して、第3節および第4節で掲げた課題をひとつずつ検討していく必要がある。とくに、アクセント核がどこに付されるのか、アクセント核が付されたモーラに結びつく音調が何であるかといった問題は、多良間方言のアクセント体系を理解する上で根本的な問題であり、重要である。

付録



付図1 (14a～c) の基本周波数曲線



付図2 (16a～c) の基本周波数曲線

参考文献

- 青井隼人 (2016a) 「南琉球宮古語多良間方言の音声学的・音韻論的構造の諸相」東京外国語大学大学院総合国際学研究所 2016 年度博士論文.
- 青井隼人 (2016b) 「南琉球宮古多良間方言の三型アクセント：その特徴と型の中和」『音声研究』20(3): 66–80.
- 青井隼人 (2016c) 「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇の記述」『日本言語学会第 153 回全国大会予稿集』, 76–81.
- 青井隼人 (2017) 「南琉球宮古多良間方言における 2 種類のアクセント型の中和」『国立国語研究所論集』13: 1–23.
- 五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』8: 1–42.
- 五十嵐陽介 (2016) 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150: 33–57.
- 松森晶子 (2010) 「多良間島の 3 型アクセントと「系列別語彙」」上野善道 (監修)『日本語研究の 12 章』, 490–503. 東京：明治書院.
- 松森晶子 (2014) 「多良間島のアクセント規則を再検討する」『日本女子大学紀要 文学部』63: 13–36.
- 松森晶子 (2016a) 「多良間島における文のプロソディー：韻律句が連なる場合の音調交替現象について」『国立国語研究所「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」キックオフワークショップ』配布資料 (2016.1.11, 於国立国語研究所).
- 松森晶子 (2016b) 「八重山諸島黒島方言のアクセントの仕組み—その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件—」『言語研究』150: 59–85.
- 上村幸雄 (1990) 『acute accent と grave accent について』沖縄言語研究センター資料 93. 沖縄：沖縄言語研究センター.

Pitch Rising in Miyako-Tarama Ryukyuan: Description of the Pitch Pattern in the Case of a Phrase Sequence

AOI Hayato

ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies /
Language Variation Division, Research Department, NINJAL

Abstract

The purpose of this paper is to describe pitch patterns in Miyako-Tarama Ryukyuan, focusing on pitch rising. It has been recognized that the three classes of Tarama accent are distinguishable according to the existence or non-existence of falling pitch and its placement. However, Igarashi (2015), Matsumori (2016a, 2016b), and Aoi (2017) have reported that Tarama accent can be realized as rising pitch in some cases.

I examine the pitch patterns of the Tarama accent based on my field data and describe the condition of realization as rising pitch. In conclusion, I claim that pitch rising in Tarama must not show in the 1st phrase; must show in the accented phrase following another accented phrase that is realized as falling pitch; and must show at the final mora of the prosodic word.

I also reanalyze pitch patterns of the “X=nu Y structure” (Igarashi 2015) and conclude that the pitch patterns of the structure can be described in a valid way if an “accent kernel” attaches to modiffee Y.

Key words: Tarama Ryukyuan, 3-pattern accent system, pitch rising, X=nu Y structure, major phrase